No. 114

ティー・ブレイク

Tea Break

無知の知

私の故郷の千葉県は比較的温暖で，冬でも霜の降りる日はほんの数えるほどしかない。そうして冬になると，東北や北海道の方から，出稼ぎの人達が来る。

伯父が土建屋をやっていた関係から，そういった「出稼ぎの人たち」に会う機会が少年の頃は多かった。そしてその人たちは，一様に優しく，彼らの故郷で取れた産物やおもちゃを私にくれたものであった。

そうした私は，子供の頃からずっと「出稼ぎの人たちは，非常に良い人である」というような印象を持っていたのである。そして，非常に愚かなことに，彼らが，夏の間に十分に仕事をし，かつ，十分な収入も得て，冬というのは余興で仕事をしに来ているかのように思っていたのである。

であるから，「出稼ぎの人たちが，金欲しさに罪を働いた」などというようなニュースを聞くと，その犯罪を犯した者は，普通以上に悪く感じられるのである。けれども，このあいだ参加した「農産漁村シンポジウム」では，彼らは自分の農産漁村を豊かにしようと志したきっかけとして，「出稼ぎに行きたくなかった」というものがあり，それを聞いたときの私の衝撃はかなり大きいものであった。

つまり，その時に初めて私は，「出稼ぎって，行きたくないほど辛いものであったんだ」ということが理解できたのである。出稼ぎの人たちが幼い私にとても優しかったのは，彼らはどうしてもその職を失うわけにはいかなかったからなのである。故郷の産物やおもちゃをくれたのも，私が社長の甥だからであり，彼らなりに点数稼ぎをしていただけなのである。そうしたけなげな心に，幼少の私は気付かず，そのまま真に受けてしまったのである。今思えば，馬鹿なことを考えていたものだと思う。けれども，今回の特集にもあるように，裁判官ですら，「事実認定」が苦手なこともある。要するに，自分が未知の出来事に対しては，その経験に基づいて，その人なりの想像力を働かせて考えるしかないのである。

これに関し，ある裁判官 OB の方に聞いたところによると，この方は実際に交通事故に遭ったことがあり，非常に痛い思いをしたという。その時に，病院に行っても簡単に診断書を出してはくれず，体のあちこちが痛く，自分の仕事にも支障が出ているのに，そういったことは保険では全く考慮されない状態で査定がなされるということを，自分自身の体験として味わったのである。そして実は，この方は，交通裁判をその交通事故に遭う前に 3 年程度行っていたのであった。そのことを評して，「実際に交通事故に遭ってみてわかったことであるが，あの頃には馬鹿な判決をしたものだ」と言っておられた。同時にこの方は，親の介護も経験されたと言う。この中には，痴呆症にかかった方もおられたようで，非常に苦労されたようであった。

ところが，同僚の裁判官で，こうした経験のない人たちの中には，例えば「介護に疲れて殺人を犯してしまった」というようなことがあると，いとも簡単に「あんなの情状酌量の余地もないよね。執行猶予なんかつける必要ないよ。実刑しかないね」と言う人が居るというのである。そんなことを端で聞く度に，「そんなに言うなら，あんたも介護やってごらんなさいよ」と言いたくなるというのである。

実際，人間というのは自分が経験したものでないことというのは，想像力を働かせるしか道がない。けれども，その想像力で十分であるのであれば，敢えて経験などする必要もない。むしろ，自分の想像と違ったことが起こるからこそ，経験というのは貴重なのであり，それをする価値があるというものである。実際に，どんな教育であっても，知恵と経験だけは与えることができない。そうしてみると，何か事件があったときに，特に人間の心や情の襞が深いものについて，その判断を裁判所に委ねるのが本当に良いことなのかどうか疑わしい。

この一方で，我々弁理士というのは，どこか司法の世界や特許係争に憧れる向きがあるようにも思えるが，人間の心や情の襞が深いものについて判断することの難しさについて考えをめぐらしてみるたびに，「やっぱり弁理士でよかった」とも思う。

（正）